

令和 6 (2024) 年度 水道土木奨学金事業 活動報告書



公益財団法人

水道土木振興財団

1. はじめに

当財団では、持続可能な水環境と社会基盤の整備に貢献する次世代の技術者・研究者を支援することを目的に、令和6（2024）年度より「水道土木奨学金事業」を創設した。本事業は、将来の水道土木分野を支える優秀な人材に対し、経済的負担を軽減することで、安心して学業や研究に集中できる環境を整えるものである。

初年度となる本年度は、全国の大学・大学院に在籍する多数の学生が本奨学金の支援を受け、学業・研究において顕著な成果を挙げた。加えて、進路や将来の社会貢献に向けた意欲的な取り組みも多く報告されている。本報告書では、学生から提出された終了報告書の内容を引用しながら、活動内容、成果、今後の展望を総括する。

2. 奨学金の使途と学業への具体的な影響

奨学金の使途は多岐にわたり、生活費、通学費、学費、教材費、研究費、さらには海外研修や学会参加費にも活用された。ある学生は博士課程在籍中にロンドンへの3ヶ月の研究留学を実現し、水道水源における藻類の異常発生に関する研究に専念した。また、他の学生は卒業設計のために模型制作費用やプレゼンテーション準備費用として活用し、全国規模の設計コンペティションに入賞するなど、経済的支援が成果に直結した例も報告されている。

また、多くの学生が奨学金によってアルバイト時間を減らすことができ、授業や課題、研究に対して以前よりも多くの時間を確保できたと述べている。特に、地方在住で一人暮らしを始めた学生にとっては、生活費への補助が精神的な安心感をもたらし、結果的に学習意欲や研究意欲の向上につながっている。

3. 活動成果と成長の実感

学生はそれぞれの専門分野で、実践的かつ社会的意義のある活動に取り組んだ。上下水道、橋梁、都市インフラ、環境衛生、防災など、多様な研究テーマの中で、学会発表、論文執筆、国内外でのフィールドワーク、官公庁や企業でのインターンシップなどを実施している。奨学金によって、学外での学びの機会が広がったことも成果として挙げられる。

また、複数の学生が国際会議への参加、外国語試験（TOEFL、仏検等）の受験、語学教材購入などを通じて、グローバルな視点を意識した取り組みを強化している。将来的に海外の大学や研究機関との連携を希望する学生もあり、水道土木分野における国際的貢献も視野に入れていることが読み取れる。

研究分野のみならず、防災教育や地域支援活動など、社会と接点を持ちながら実践的な課題解決に関わる学生も見受けられた。地域社会に根差した土木技術者を目指す者、

公務員として地域インフラを支えたいと志す者、民間企業の技術者として革新的な技術開発に携わる者、それぞれの進路に向けた準備と努力が具体的に記されている。

4. 支援への感謝と今後への展望

全ての学生が口を揃えて述べているのは、「経済的支援によって、やりたかったことに挑戦できた」「安心して学生生活を送ることができた」という実感である。中には、「この奨学金がなければ、大学院進学を断念していたかもしれない」という切実な声もあった。

将来に向けては、「土木構造物の老朽化対応」「水環境の国際的課題解決」「災害に強い地域インフラの整備」など、それぞれが社会課題の解決に挑む意欲を持っている。これらの姿勢は、当財団の理念に合致しており、本奨学金事業の存在意義を強く裏付けるものである。

5. 総括

本年度より開始された水道土木奨学金事業は、当財団が目指す「水道・土木インフラの発展に寄与する人材の育成」という理念に基づき、意義深い第一歩を踏み出すことができた。学生の報告に共通するのは、奨学金の支援によって学業や研究、進路選択に対して自信を持ち、主体的に取り組む姿勢を確立している点である。

学業成績や研究成果のみならず、社会との接点を意識した活動、防災・水資源管理・インフラ整備などの公共性の高い領域での志向、さらには国際的な視野を持つ姿勢が多くの学生から見受けられた。これは、本事業が単なる経済支援にとどまらず、未来を担う人材の成長に大きく寄与している証左である。

また、本奨学金が生活面を支えることで、学生自身が自己研鑽に集中し、進路や社会貢献への意識を高めたことも大きな成果といえる。困難な状況にある学生が学びを継続し、挑戦を実現する姿は、社会の持続的発展に資する希望そのものである。

今後も当財団は、志を持つ学生に対して継続的な支援を行い、学術的・技術的分野における人材育成の一助となるべく取り組んでいく。学生の成長と活躍が、水道土木の未来を支える確かな力となることを確信し、さらなる発展を期して本年度の活動をここに総括する。

以上